

エチオピアと私の思い ■ 和田正平

ずっと、1964年からエチオピアに熱い思いをよせてきた私だが、訪れたのはわずか2度にすぎない。最初はハイレ・セラシエー世皇帝時代で、医療に携わっていた大瀬貴光博士のお世話になった。「まずは原産地のコーヒーを味わいなさい」といわれ、博士のエチオピアへの思い入れの最初の洗礼を受けた。2回目は革命後の軍事政権下で、目的は民族学博物館開館に備えた「エチオピア展示」のために、大蔵省から出向していた島田真一氏にご協力をいただき、数々の十字架、ゲイズ語で書かれた聖書、インジュラをのせる「マッサブ」そして、エチオピアの家庭で一般的なコーヒーを飲むのに必要な道具一式等々、エチオピアを代表する民具、民芸品を収集した。

ところで、なぜ私はエチオピアに特別な関心をよせるようになったのか。たんに「美女とコーヒーの国」に魅せられたわけではない。実は、私が最初にフィールド・ワークの対象にしたイラク(虜)は、「アビシニア高原をリフトヴァレーに沿って南下したアフリカで最も南へ移動したハム系の民族だ」と言われていたからである。事実、その後言語学者C・エーレットによってアフロ・アジア系南部クシュと分類された。つまり、この言語は起源はアジアで、アフリカではソマリアからエチオピアにかけての地域が源郷と想定されたのである。また、人種的にもイラク女性の中には褐色の美肌の持ち主がいて、植民地時代、白人行政官の間では話題になっていたようだ。1930年代このあたり一帯を踏査した白人一行は「ビューティフル・ウンブルー」(イラクの他称)と旅行記の一節に記している。

現在のイラクは混血が進んで、そんな面影の女性を探すのも難しいがしかし、自らの祖先を語る伝承の中には本来的に高原の民であることを裏付ける物語があり、それは、もっともイラク的な民話だと私は思っている。すなわち「昔、雲は頭上間近にあった。女たちが杵をつくると、雲が近くにあり邪魔だった。そこで、雲よ！上によけておくれというとき雲は少し上の方に去ってくれた。つき終わって、雲よ！戻っていいよというとき、雲はもとの位置まで戻ってくれたという」。これは私が編集した『イラクの昔話』に「天地分離の始まり」として収録されているが、「背の高い人が外出するときも雲が邪魔になったという」。

この話のモチーフは、天高く地平線まで遠望できるサバンナの自然、つまり低地に住む平原の民の間では誕生しない。植民地支配がまだ内陸に及ばず、マサイの襲撃が猛威を振るっていた頃、イラクはリフト上方の懸崖な山間部に逼塞していた。そこは、深い霧に閉ざされ、物語を日常的に実感できる環境であった。しかし、彼らはこの物語をリフトヴァレーのどのあたりから語り継いできたのであろうか。そんなイラクの出自をトレースするのは文化人類学では困難であるが、最近、分子人類学が発達して、遺伝子DNAの分析を通して集団が分岐、拡散した様子がある程度、知ることができるという。もし、イラクとエチオピア高原の結びつきを科学的に証明してもらえれば、イラクの「アウト・オブ・エチオピア」を東アフリカ史として描くことができるのだが。